

沖縄のオランダ墓

——沈没英船ベナレス号を追って——

渡 辺 美 季

一 はじめに

二〇一〇年四月、私は神奈川大学に世界史の専任教員として着任した。以来二年間、同じ世界史専任であった岡島千幸先生には、言葉では言い尽くせない程お世話になった。新しい環境に私が順調に適應できたのは、ひとえに先生のお陰と言ってよい。この間、不肖な私が校務や授業について先生にご相談しアドバイスをいただくことは多々あったが、そのせいか互いの研究についてゆつくりと話をする時間はあまりなく、そのことが小さな心残りとなっている。そこで岡島先生のご退職記念号に小文を寄せるにあたり、私が現在進めている研究の中から、先生のご専門でありイギリス史にいささかなりとも関係のあるトピックについて簡単に紹介し、岡島先生ならびに読者のみなさまのご高見を乞うことにしたい。そして後日、様々な雑務から解放された先生とゆつくりお会いする機会が得られたら、今度こそ心ゆくまで研究の話をしたいと思う。

二 オランダ墓とは

現在、沖縄にはオランダ墓（方言ではウランダ墓）の名で知られている史跡が二つある。一つは沖縄本島北部の羽地内海に浮かぶ屋我地島（名護市）のオランダ墓、もう一つは本島最北端に近い東シナ海に面した宜名真という集落（国頭村）のオランダ墓である。ただしオランダ墓というものの、実際に埋葬されているのはオランダ人ではなく、フランス人とイギリス人である。そのほかに、那覇市泊港北岸付近にある外国人の墓所「泊外人墓地」も、かつてはオランダ墓と通称されていた。しかしここに埋葬されているのも中国（清国）人・アメリカ人・イギリス人などで、オランダ人は一人もいない。ではなぜこれらの墓はオランダ墓と呼ばれているのだろうか。

それはかつての沖縄で、西洋人が「ウランダー（オランダ人）」と総称されていたためである。⁽¹⁾その背景には徳川幕府の「鎖国」政策があった。この政策は、当時、幕府に従う「異国」であった琉球にも波及したが、その中で西洋諸国の内オランダのみに日本との通商が認められていたことから、琉球では次第に西洋人を「ウランダー」と呼ぶ習慣が生まれたのである。この呼び名は、琉球王国が滅んで沖縄県になった後も使用されたが、戦後「アメリカ」の語に取って代わられ、徐々に使われなくなったようである。

さて屋我地島と宜名真のオランダ墓の内、屋我地島のオランダ墓に関しては詳細な史料が残っており、一八四六年に寄港したフランス艦隊の乗組員二名を埋葬したものであることが判明している。⁽²⁾このフランス艦隊は、

セシーユ提督の率いる東洋艦隊の船で、北部の運天港に寄港して琉球に通商貿易を求めたが、琉球側の拒絶により交渉は失敗に終わり、約一ヶ月後に琉球を去った。この間に一等助銃工ギタール・フランソワ・シャルル（二三歳）、二等水夫シャリュス・ジャーク（三五歳）が病死し、運天の対岸にある屋我地島^{うんていぼる}運天原に埋葬されたのである。それぞれの墓碑の上部には「永光照之（永光、之を照らす）^{これ}」の四文字が刻まれ、その下部に国名・船名・故人の聖号・死亡年月日などが漢字で記されている。

三 宜名真のオランダ墓

一方、宜名真のオランダ墓に関しては、一九一九年に刊行された島袋源一郎『沖縄県国頭郡志』（国頭郡教育部会）に、一八七四年に同地に漂着・沈没したイギリス商船の溺死者を合葬したものと説明されている。また同書によれば、墓は当時、長さ三間（約五・五メートル）、幅一間（約一・八メートル）のスペースを、豊大の岩で囲み、その中を土砂で埋めた状態であったという。現在は、一九八一（昭和五六）年に建立された記念碑の後方に、土中に埋もれた花崗岩と見られる石材が確認できる。この石は沈没したイギリス船の積荷ないしはバラストの一部であると口伝されている。

同じ石材は、大宜味村大兼久の「靈魂之塔」（一九二一年に忠魂碑として建立され戦後に転用された）や、今帰仁村運天の「源為朝公上陸之址」碑（一九二二年建立）などにも使用されており、沈没船の鉄錨も国頭村奥の浜辺に保存されている。また近年、南西諸島水中文化遺産研究会（沖縄の水中文化遺産に関心を持つ若手

の考古学者たちが中心となって二〇〇九年に立ち上げた研究会）や沖縄県立埋蔵文化財センターにより宜名真海底の調査が実施され、沈没船の船体の一部や積荷と見られる中国製陶磁器・洋食器・ワインボトルなどが発見されている。

このように陸上・海中に多くの痕跡を残す宜名真のオランダ墓であるが、その被葬者の氏名や沈没船の名称などはごく最近まで不明のままであった。その最大の理由として、関連する同時代の記録がほとんど見つかっていなかったことが挙げられる。こうした中、私は南西諸島水中文化遺産研究会の「海の文化遺産総合調査プロジェクト」(二〇〇九―二〇一一年度)に参加し、宜名真のオランダ墓に関わる共同調査において文献史料の搜索・分析に携わることになった。

そこでまず琉球の同時代史料を片っ端から調べてみたが、残念ながらめぼしい記録は出てこなかった。理由は不明だが、当時の琉球では明治政府による日本への併合政策が進められており――いわゆる「琉球処分」であり、この政策が完遂され王国が消滅するのは一八七九年である――、大きな混乱と動揺の中で宜名真の遭難事件に関わる行政文書は十分に整理・保存されなかったのかもしれない。あるいは他の多くの史料と同様に沖縄戦(一九四五年)で灰燼に帰してしまった可能性もある。

琉球の史料が見つからなかったため、今度は日本およびイギリスの史料を搜索することにした。その結果、幸いなことに外務省外交史料館蔵「琉球藩在勤来往翰」とイギリス外務省文書(F.O. Records created and inherited by the Foreign Office)の中に宜名真の遭難事件をめぐる詳しい記録を見出すことができた。⁽³⁾これらの記録によれば、事件は一八七四年ではなく一八七二年九月二九日に発生しており、船名は「ベナレス

(Benares)」、香港から茶・砂糖・米を積載してサンフランシスコに向かう途中で座礁・遭難し、船長以下三名が溺死し、五名が救出されたという。死者の内、二等航海士ロバート・ドゥメロー、料理人兼給仕サミュエル・ラッフル、見習生フレデリック・ブレット、A・B級の水夫アンドリュー・ジャンセンの四名が琉球で埋葬されており、彼らが「オランダ墓」の被葬者であると考えられる。

一八世紀後半以降、欧米船は調査探検や薪水補給などの目的で琉球にしばしば姿を見せるようになり、やがてアヘン戦争（一八四〇～四二年）の前後から開国・通商・布教の要求を掲げて頻繁に来航するようになった。一方、中国（清朝）の開港や日本の開国などを契機に、中国とアメリカを結ぶ太平洋航路を欧米船が盛んに航行するようになり、こうした船が琉球に寄航したり、近海で遭難したりすることが増えていった。ペナレス号はそうした船の一つだったのである。

さてペナレス号の遭難後、事件は、①琉球による在清イギリス公館への連絡、②生存者救出のためのイギリス船の那覇来航、③イギリス政府から琉球への謝礼（金時計）の贈呈という形で推移した。一連の史料からは、琉球が生存者に対して食糧や衣服の支給を無償で行ったこと、そのことに生存者およびイギリス政府が大変な感銘を受けていたことが確認できる。事件後、イギリス政府が琉球へ謝礼を贈ることになったのもそのためである。

これは一見、琉球とイギリスの人情味溢れる友愛のエピソードのようだ。しかし現実はいく少しシビアである。実は琉球の「親切」は、欧米船の頻繁な来航に頭を悩ます琉球の政策の一環としてなされたものだった。琉球の政府（琉球藩、旧首里王府）は、欧米諸国との接触による様々なトラブルを恐れ、欧米船の来航を極力

避けたいと考えていた。とはいえ琉球のような小国では、武力で欧米船の来航を阻止することはできない。そこで政府は、欧米船がなるべく琉球に立ち寄らないような武力以外の方法を探ることにした。それは「琉球は小国で産物も乏しい」などとことあるごとに琉球の魅力のなさを欧米人に訴え、必要な食糧や薪を無償で与えて早々に琉球を立ち去ってもらうよう努めるというものだった。無償としたのは、有償にすると金さえ払えば必要なものが手に入ると欧米人に思われ、欧米船がさらに頻繁に立ち寄るようになってしまふことが懸念されたためである。

イギリス人が感じた琉球の「親切」——もちろん親切な役人や村人もいたことだろう。しかしそもその大前提として前述のような琉球の政策が存在したこと、それがイギリス人に親切と「誤解」されてしまったこと、この「誤解」が新たな欧米船（謝礼を届けるイギリス船）の来航を招くという琉球にとってはまことに皮肉な結果となったこと……この事件は見方を変えたとそんな風にも読み解けるのである。

このように事件をめぐる文献史料からは、度重なる欧米船の来航や強まる日本の政治的影響力の中でどうか「王国」を維持しながら独自の外交政策を展開していた滅亡直前の琉球の状況がきわめて具体的に把握できる。その他、遭難事件の詳細や琉球を見たイギリス人の率直な感想なども知ることができ、興味深い⁴。しかし残念ながら船の構造や積荷に関する記載は非常に少なく、陸上・海中に残された豊富な遺物と文献史料とを十分に結びつけることはできなかった。この問題を解消すべく今後はベナレス号の船型や積荷の保険に関わる史料の探索を行いたい。そのためにはやはり一度イギリスに調査に行く必要があるだろう。ベナレス号の船影を追いかける日々はまだまだ終わりそうにない。

注

- (1) ウランダーの語義に関しては以下の文献を参照した。仲井間憲児「ウランダー」沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』上、沖縄タイムス社、一九八三年。高良倉吉「ウランダー（欧米人）たちの跡」『続おきなわ歴史物語』ひるぎ社、一九九七年。
- (2) 屋我地島のオランダ墓に関しては以下の文献を参照した。大熊良一『異国船琉球来航史の研究』鹿島出版会、一九七一年。『なきじん研究』三、沖縄県今帰仁村教育委員会、一九九三年。『刻まれた歴史―沖縄の石碑と拓本―』沖縄県立博物館友の会、一九九三年。
- (3) イギリス外務省文書の搜索と分析には新居洋子氏（東京大学大学院生）の協力を得た。
- (4) 詳細は別稿に段階的にまとめる予定であるが、さしあたりすぐ読めるものとして以下を挙げておく。アジア水中考古学研究所編『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進（海の文化遺産総合調査報告―南西諸島編―）』同研究所、二〇一三年。